

そして偏見に染められやすい植民地期の朝鮮こそ、その歴史的位置づけが明確でなければ、日韓の歴史認識は平行線をたどるしかないと思っている。だからこそ、一国史を越えて、被害者と加害者の対立的議論だけではなく、歴史的資料にもとづいて当時を理解することを目指している。こうした作業が、きっと日韓の歴史認識の交流において役立つと、私は信じている。

## 歴史研究から自分を探す

— 西洋史研究の楽しみ —

山口 みどり

歴史学との出会いは大学三年生の時、実は「おすすめ楽勝科目」としてでした。当時私は東京外国語大学の英米語科に在籍していたのですが、専門科目にはさほど興味を持てず、勉強よりもサークル活動の方に勤しんでおりました。そうした中、「おじいちゃんのイギリス史」は面白いし単位も取り易いと聞き、「おじいちゃん」こと松

村越先生の「一八世紀庶民生活史」を取ったのです。松村先生から教わったのが、社会史というそれまで私が知らなかった領域の歴史でした。

高校での歴史は、政治史・外交史が中心でしたが、松村先生の授業では、住居や娯楽といった一見些細な事象から、大きな社会の変化を捉えることができることを学びました。視点を社会の底辺に持ってくることで、歴史的意義が一八〇度変わってしまうのも新鮮な発見でした。「おじいちゃん」の社会史に感動した私は、もう少しだけ勉強してみようと早稲田大学の史学科に学士入学したのです。

歴史学との出会いはこのように実に不屈きなものであったのですが、早稲田で卒論・修論を書いていくうちに、すっかり「はまって」しまいました。人の研究を学ぶ段階から、今度は自分なりの視点で歴史を調べ、分析し、論を組み立てるという段階に入り、その面白さに引き込まれてしまったのです。卒業論文では一九世紀イギリスの女性家庭

教師Ⅱガヴァネスをテーマに選びました。当時のイギリスでは、身分ある女性の有給労働はタブー視されていたのですが、様々な理由から女性の数が過剰で、「余った」独身女性が自活する必要が強まっておりました。こうした女性が唯一体面を保てるとされた職業、つまりレディとそうでない人を分ける階級の境界線上に位置していたのがガヴァネスでした。「レディ」の地位にしがみつくためガヴァネス職に志願者が殺到し、その窮状が社会問題となったこと、教師とはいえ無学な者も多く、ガヴァネス救済を契機に女子教育改革が始まったことなど、当時の世相を反映する存在でした。

ある時ふと考えました。働いて自活し、場合によっては家族を養うガヴァネスの姿は、当時の基準では女性よりもむしろ男性に求められるものに近かったのではないか、つまり、ガヴァネスは階級だけでなくジェンダーの境界にも位置していたのではないかと。こうした自分なりの視点から史料を読み直すと、様々な事象の間にこれまで

見過ごされていた隠れた繋がりが見つかる、私は歴史研究の醍醐味はそこにあると思っています。

卒論・修論とガヴァネスを研究しましたが、この頃私は、これほど面白いテーマは他にはあるまいと思っていました。他のテーマを研究している人は気の毒とまで思っていた位で、この後は何を研究しようかというのが唯一の心配事でした。ですがこのような心配は全く必要ないことでした。歴史の研究というのは、確かに昔々のことを研究するものですが、常に研究する個人の関心を反映してあります。ガヴァネスというテーマに当時の私が夢中になったのは、友達が就職または結婚していく中で、自分はどういう人間なのか、自分はこういったものの見方をするのかを模索していたことと表れなのでしょう。歴史の研究をすること、いわば「自分探し」をしていたのです。そして自分自身が成長した時、また新たな問題意識が生まれ、自ずと違ったテーマが見つかるように思います。

## 彙報

同じように、歴史研究は常に現代社会の問題意識や価値観を映し出しています。イギリスでも、一九六〇年代に左翼の運動が盛んになった時には労働史、女性運動が盛り上がった中では女性史研究が発達してきました。ダイアナ妃のスキヤンダルが社会を賑わせた時には、歴史上の王室スキヤンダルを見直す研究が相次ぎました。スコットランドの自治や、EUの問題がクローズアップされる中、イギリスのナショナル・アイデンティティに関心が集まっています。新しい視点・視角から何度も何度も読み取り直す、そしてその成果は今の社会に還元することができのです。だから常に新しいし、飽きないのです。

もちろん、大学院に進んで研究者になる人はごく一部でしょう。ですが、見回すと学部生の研究にも、ヴィクトリア期の女性観を当時の女性運動家のドレスの色から研究するものや、美術館のコレクションからイギリスのナショナル・アイデンティティを探るものなど、独自の視点を活かした意

欲的な研究が目につきます。また、日常生活の中に西洋史研究から得る楽しみもたくさんあります。読書や美術館巡りは、時代背景を知ることでも何倍も面白くなりますし、海外旅行の楽しみも倍増するでしょう。

歴史研究に少しでも興味のある方は、西洋史専修室をのぞいてみて下さい。このシンポジウムを期に大学院生や若手教員と学部のみなさんとの交流の機会が増えればうれしく思います。

## 私の考古学ことはじめ

小 高 敬 寛

私は高等学院在学時に、ミノア文明やキュクラデス文明といったギリシアの青銅器文化に興味をもち、第一文学部に入学しました。その煌びやかな工芸品に魅せられていましたので、専修進級時には美術史と考古学のどちらに進むべきか迷いましたが、結局のところ何となく考古学専修を選択することにしました。